

寸心先生日記抄 (四)

○明治三十七年

〔見返しに左の語を書す〕

Benutze tren die Zeit und die dir verbleibenden

Kräfte, wo nicht, so klage nicht über die

Ungunst deiner Tage.

一月一日 午前九時學校の拜賀式に列した。田部君よ

り藤井君の子供が危篤だといふ話をきいたから、森

内君と二人で見舞にいつた。歸り途に年賀の爲に島

田と牧師とへ立寄つた。弟と上山先生が年賀にきた。

藤岡より手紙が來て向の細君が死んだといふことを

知らせた。向へは久しく無音であつた。吊の手紙

をかいた。

新聞をよむと晩に母・妻と話した外は坐つた。晩は

今日元日だからといふので休んだのだ。

〔備忘欄に〕今日は兩回打坐した。

オリギネスは *amanutius* といはるゝ位意志の強

い人であつたとの事だ。

一月二日 今日三時頃に目さめ坐したが、どうもよく

いかなかつた。朝遅く起きて朝食をすましたらば十時頃であつた。午後三矢が尋ねてきた。夕に湯月君が年賀にきた。夕食後子供と遊んだ。

しきりに佛語を學んで見たい心持がした。どうも中

世哲學の書は佛語によきものがあるようだ。

〔備忘欄に〕今日も日の中はぶら／＼してすごした。

一月三日 湯に入つた。午後金仙、堀田、内田三人來

り五時頃まで話した。

讀賣新聞公開狀の中に雅邦と芳崖とを比して、一は

凡庸の至れる者にして一は眞の天才なりといふてあ

る。

しきりにアウグスチンの書をよみたくてたまらぬ。

夜は坐つた。

みかんを食すごして腹の工合が少しくわるい。

獨逸語がよく教へられるなどゝ威張つて居るのはつ

まらぬ奴だ。

〔備忘欄に〕今日も日の中はぶら／＼した。

一月四日 午後高橋が年賀にきた。一年ぶりである。

悪次郎方の借金のことなど相談した。

夜三、塾にゆく約束があつたから、時頃から出かけた。途に藤井君を尋ねたが、子供は少しよい方であると言つた。

三、塾には三竹君と書生四人で牛肉を食ひ、十一時頃まで話した。

三竹君は人は狐疑するからいかぬ、少し損なる事でもやり透せば途はあるといつた。面白い言だ。

一月五日 昨夜食ひすぎて胃の工合がわるいから、散歩の爲に小田野までいつて湯月君を尋ねた。

スペンサーとシルレルとをよんだ。シルレルはどうも淺薄である。

ゴルドンの傳の中に人は馬鹿者といはれねばエラくないといふてある。實に明言である。

〔備忘録に〕 食事の外間食すべからず。胃のおしきは大に元氣をそぐ。

一月六日 午前考をかいた。午後年賀狀をかいた。夕には打坐した。

川村幸一が話にきた。寄宿舎のことなど話して歸つた。

一月七日 午後藤岡と得能とが尋ねてきた。

夕に白石が歸つてきた。

夜は家内と話した。

〔備忘録に〕 人なみにならうといふ心懸けでは人なみにもなれぬ。

一月八日 今日から學校が始つた。

ゼームスの Varieties of rel. Ex. uriance と云ふ書物⁽⁵⁾をかりてきてよみ始めた。

一月九日 午後三時半より獨法二年の級會に出席した。

自分はゴルキーの話をした。ウォールフアールトは翻譯を奨励する話をした。村木君も来て居た。それから午飯を食ひ、名指をやり、後は餘興で、九時頃余と村木君と早く歸つた。

一月十日 〔略〕

一月十一日 午後例により讀書會をひらき、余と森内

君とワルレンシタインをよんだ。

夜は心理講義の草稿「記憶」をかいた。

一月十二日 今日珍らしく天氣がよかつた。朝湯に入つた。

午後學校からの歸途田部・森内と寺町まで散歩をした。それから森内の宅によつた。

森内が又余が廣島に行くならんといふ話をした。い

つもかくの如き事をいはるゝのは不快だ。

夜は桑原が來た。

白石などが今日からピンポンを始めた。

藍花は十年の修養を積んで今日に至つたといふ事が讀賣にかいてあつた。

〔備忘欄に〕 今日は大に打坐した。奮發すべしだ。

一月十三日 午後三竹君がきて夜の八時頃まで話した。

それからシヨベンハウエルなど讀んだ。

一月十四日 けふは新年始めてテニスをやつた。

一月十五日 歸宅後下野の件につきて佐倉、大野、加

藤がきた。それから惣次郎がきた。

藤岡から松本が重病であるといふ手紙がきた。藤岡と片山とへ出す手紙をかいた。

一月十六日 午後は書生とピンポンをした。富岡がき

た。

夜は堀尾が話にきて何もできなかった。

八田三喜君より松本君が重患の由を報じてきた。

〔備忘欄に〕 左の二書を記入す。

新しいそぶ物語 小波 明治お伽断七 博文館

母のため 高橋平三郎 元々堂

一月十七日

午前は草稿。

午後はピンポンとダンテ。山田がきた。

夜は三、塾にいつた。本多男爵がきて種、面白い話をした。十二時家に歸つた。

此日は大に雪がふつた。

一月十八日 午後渡邊君が神經病で危険だといふので

三竹君と共に見舞にいつた。

一月十九日 入湯、讀書、午後桑原がきた。

夜はダンテをよんだ。

一月二十日 今日草稿と讀書。

一月二十一日 今日午後獨逸講文會でダンテを講じた。

聽衆はあまり多くなかつた。

一月二十二日 原君へ Grosse O Formen der Familie

Hein といふ書をかした。

一月二十三日 午後ピンポン。三股、山田と富永とき

た。

一月二十四日 午後ピンポン。夜森内、村木兩君がき

てヘーゲルをよんだ。

一月二十五日 午後讀書會をやつて古事記の中巻がす

んだ。

一月二十六日——三十一日 〔略、二十八日より病氣休校〕

二月一日 今日から學校へ出た。讀書會にて古事記下

巻をよみ始む。

〔備忘欄に〕 本日は又打坐した。

二月二日 午後出校、歸路愚次郎方に立寄る。

夜は書店と話をした。

三、塾生と北條へ宛の手紙をかいた。

二月四日 午後ダンテを講じ了る。

二月五日 午後教官會議あり。

二月六日 角田君第八師團の召集に應じ當地を去ると

のことに付、午後三竹君と共に訪問す。

夜三、塾にゆき富永氏の聖書講義をきく。

二月七日 午後三時公園に於て角田君を送る爲に三竹

君と三人會合す。

歸途香川氏に逢ひ石川君と共に訪問、十時歸宅。

此日日露談判破裂の號外出づ。

〔中絶〕

四月一日 今日天氣よし。二部三年獨譯の點付を終つ

て午後はテニスをした。

夜は本間と話した。

四月二日 今日も天氣は至極よかつた。

午前家を出て高岡町により得田氏も來會、共に其飯

を喫し、石川君を訪ひ洗心庵に入った。併し夜また

歸宅した。

今日はつまらなく一日をくらしした。

〔備忘欄に〕 左内云ふ、推氣を去れ。

四月三日 今朝本間が歸郷した。午前太陽と新小説を

よんだ。

午前中に歸庵せんと思ふて居たが、家内が西本願寺

夫人を見にゆく留守をして午後まで居た。

夕に山田を訪ね、歸庵。

四月四日 午前ぶら／＼。午後石川君を訪ひ、校長を

訪ふて留守の件をきく。

夜は石川君來り眞面目に坐つた。

四月五日 午前歸家。十日頃に此師團に動員令下るな

らんとの話。

午後歸庵、得田氏來る。

夜は坐した。

〔中絶〕

四月十八日 〔以下この記事最書〕今日ハ學校ノ記念日デ

アツタ、之ヨリ強固ナル意志ヲ以テ定メタル所を斷行スベシ

古人刻苦□光明必盛大

一、修養

二、讀書□文章

三、運動

四月十九日 朝三十分程靜坐、午前讀書出校。

午後村木君にて佛語をよむ。

夜思考。

〔備忘欄に〕 今日村木君にて菓子をつくつた。

四月二十日 〔備忘欄に〕 今朝遅く起き坐せず。

〔中絶〕

五月一日 坐、午前入湯、林歌子来る。

午後釋尊降誕會にゆき加藤咄堂、近角常觀の演説をきく。

夜林君方に於て會讀。

九連山を攻むるとの戰報来る。

〔備忘欄に〕 今日は大に打坐。

〔中絶〕

六月一日 午後文科三年生の爲に寫眞をとる。

夜獨語教師と共に Wohlfaht 方に招かる。

六月二日 午前三時五十分茨木君歸る。

六月三日 午後六時より金谷館にて茨木君の歡迎會あり。

夜魚市大火、十一時より發火午前三四時に達す。

六月四日 午後ナツプ。

夜浴後ウオールフォートを訪ふ。

〔中絶〕

六月二十九日 午前十時二十分惣次郎出征。

夜三、塾に會合、三竹・石川来る。

六月三十日 午後七時二十分ハビラント出立。

七月一日 午前クノー・フイツセル氏スピノーザをよむ。

午後一時より夜十二時まで停車場に出征軍人を送る。

磯田君二時五十分出立。

山田、三股来る、逢はず。

七月二日 午前スピノーザ、午後晝寐。井伊谷来る。

〔以下略〕

惣次郎廣島着の電報来る。

〔備忘〕 夜坐一時間□□間食

〔以下缺〕

〔備忘〕 夜坐一時間□□間食

〔以下缺〕

〔以下缺〕